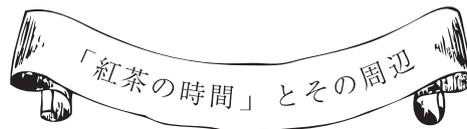


きもちは、 言葉を さがしている



第12話

水野 スウ

西東京紅茶の時間ファイナル

週に一度、石川のわが家でひらく「紅茶の時間」があり、川越や川口や大津、といったいくつかの町で、そこに暮らす人たちが月に一度ひらいている「紅茶の時間」があり、そして、12年前に亡くなった姉のちいさな家でこの10年間、秋の二日間だけひらいてきた「西東京紅茶の時間」という場があります。

今年4月に、その「西東京紅茶」の最終回をしました。

といっても、家そのものがなくなってしまうわけではなく。娘とそのパートナーが、彼らのあたらしい暮らしをこの家ではじめることとなり、それなら彼らにバトンタッチをする前に、これまで西東京紅茶に来てくださった方たちにも、この家にも、区切りのごあいさつをする必要がありそうだな。

この家と、ここでの10年の歴史をふりかえりつつ、おうちのものがたりを語り、この場に感謝のワークショップをしよう、と思ったのです。

西東京紅茶のはじまり

姉がこの場所に家を建てたのは25年ほど前。姉が父を見送り、一人で暮らすには広すぎる水野の古い家を処分した後、この土地にささやかな家を建て、それ以後、この姉——続柄からいえば、私の兄の伴侶——の西東京の家が、いわば私の実家となった。

姉が亡くなった当初は、私が東京に用事で行った時に雨戸をあげ、風を通し、寝泊まりするのに使っていたけど、でもそれだけじゃ、姉もこの家も、なんだかさびしいなあ。

そう思った時、ならば年に一度、ここで紅茶をひらこう。そうしたらせめてその日だけでも、この家にあらたな風がはいる、紅茶ポットやティーカップが大活躍して、人の話し声や笑い声がにぎやかに行きかって、おうちだってきっとよろこんでくれるだろう。そんな思いつきからはじまった西東京紅茶だった。

川越や川口といった、すでに紅茶仲間のいるところに出かけていくのとも、主催者が定まってい

る場所へお話の出前に行くのとも違う、西東京紅茶の場合は、家が主催者になるという性格上、どんな人たちが集まってどんな時間になるやら、いつも前もってはまったく見当がつかない。

石川で開いている毎週の紅茶と似ているような、だけど毎回違うテーマをかかげてワークショップの参加者をつのるという点ではおおいに違って、いつだってその日その時、顔を合わせたまぜこぜな人たちが創り上げる一回こっきりの3時間が、姉の家のお茶室を舞台にくりひろげられるのだった。

毛布とハンテンとうち物語

今回の西東京紅茶に集まってくださったのは、両日とも、まるで申しあわせたかのように、12名づつ。お座布団をくっつけて四角くすわったら、8畳のお茶室がびったり満杯。その顔ぶれと組み合わせは、まさにいちごいちえだ。

2日とも4月の中旬にしてはえらく冷える日で、古いエアコンをすでに取り外した姉のお茶室は、暖をとるものが何もなく、めっちゃめっちゃ寒い。

で、家中のハンテンと毛布を部屋にもちこみ、寒い人はコートを着たまま、どれでもお好きに、羽織ったり、お膝にかけたりしてくださいね、と。

はじめは遠慮がちだった人たちも、だんだん毛布をかけだした。足もくずせて楽ちんね、などと言いながら。後から写真を見ると、部屋の中でみんながみんな、毛布を膝にかけてる図が、かえってアットホームでいい感じ。

そんな空気の中で、まず私からすこし、このうちの物語を語らせてもらった。

「この場所は、もともと兄夫婦が新婚時代の7年間をすごした土地です。だけど兄が自死した後、ほかに行きどころのなかった義姉は、この場所を離れて水野の家に入り、それからは、父の身のまわりの世話をし、母を亡くした中学生からの私の、母親がわりをしてくれました。

そして父を家で看取った後、姉はここにちいसानな家をたて、一人で暮らしはじめたのです

姉と私がこの家で、兄の死についてはじめて語りあうことができたのは、兄が亡くなってから、なんと丸40年もたってのことでした。

兄の死後ずっと、姉が自分を責め続けながら生きてきたこと、父を最期まで世話する、という姉の固い決意も、それだけ兄への贖罪のきもちが大きかったからだということ、あえて口にはしないものの、私は十分にわかっていました。

だからこそ、姉に対して、責めるどころか今ももう感謝のきもちしかないことを、どうしても言葉にして伝えないわけにはいかない、とかなり前から思っていたのでした。

兄との間に子どものいなかった姉が、いきなり降ってわいたように、義理の妹の親代わりをすることになり、やっかいな思春期の娘に手こずりながらも、私を懸命に育ててくれたこと。

老いた父を家で看取ってくれたこと。

何より、私の娘を心からいとおしみ、本当の孫として愛してくれたこと（そのおかげで、娘は大好きな母方の祖母と、東京のお里を持つことができたのです）。

今ふりかえってみても、あの日の真剣な話しあいは、40年の時を経て姉妹でようやく交わすことのできた、魂の対話だったなあ、と思います。姉が病いに倒れて突然に逝ってしまったのが、その対話の日からわずか半年後のことだったから、なおのこと。

何十年も伝えられなかった感謝のきもちを最後にきちんと言葉で伝えられて、本当によかったなあ、と今もくり返し思うのです。

姉と私の二人きりのそんなドラマが起こったこの家は、姉の死後、西東京紅茶をひらき続けてきたことで、姉をまったく知らない人たちにも、姉の生き方や暮らし方の何かほんの少し、を感じてもらえる場にもなっていたようで。

そんなわけで、私はこの家で「暮らした」ことは一度もないけれど、この家には特別の想いを抱いているんです。

この10年余り、主を持たなかった一軒の家が、新しい住み手を迎える前に、最終回の西東京紅茶の時間を集まった人たちとわかちあう。それが、

今回のファイナル紅茶をひらくことの意味、そして、このおうちへのありがとう、なのかな、と感
じています」

私の語りの後のティータイムの時には、熱々の紅茶でお腹も暖まり、いっぱいしゃべったみんなの体温で部屋も暖まり、気づいたらもう誰も毛布をかけていませんでした。

つながり自己紹介

参加して下さったお一人一人に、今日、どうしてあなたはここにいるのですか、と問いかけての、つながり自己紹介。二日間の顔ぶれは、こんなふう。

まず何人かは、東京近辺の紅茶によく参加してくれるおなじみさんたち。愛知からきたSくは、父が郷里出身の若者たちの育英会事業をしていたことから、古い水野の家の隣りで学生時代をすごし、娘のことは1歳半から知っている人。絹の靴下など、冷えとりグッズと雑貨のお店をひらいている人。

大学で、『ほめ言葉のシャワー』の授業を展開して下さった先生。クッキングハウス代表の松浦幸子さん、メンバーさん、スタッフ、クッキングハウスの勉強会やおはなし会でよく会う人たち。

この春、農学部を出て、山梨県庁で林業にかかわる仕事についてた人。

去年、出前にうかがった東海村から駆けつけてくれた人。映画「シャル・ウィ・ダンス？」に出演していた女優さん。古い紅茶仲間、転勤するたび、その地で紅茶の時間をひらいてきた人。

富山の小学校へのお出前で会った時は小学生、今はお母さんになってた若い人。夫の会社の先輩のおつれあいさん。紅茶っていったいどういうところだろう、でもここでするのは最後、というので来ました、と、私も初めて会う人たち。

それから石川からの紅茶仲間、そして、娘とパートナーの彼も。

この、なんともバラバラな人たちが、不思議なつながりやそれぞれの理由から、この家にこの日、集まってきた。そういう12人の醸し出す、いちご

いちごの感覚をからだに感じながら、このおうちとは別の、あるおうちの物語をみなさんに聴いてもらった。

A子の、おうち物語

今からもう10数年前のこと。中学の同級生だったA子と、久々のクラス会で再会してから、東京と石川の間を何度か便りが行き来した。

やがて彼女はがんを発病し、東京の友人たちには病気のことを知られたくないけど、あなたにとでも逢いたい、できたら泊まりがけで家に来てほしい、という便りを何度かくれた。

田園調布のお屋敷のようなA子の家を訪ねた時、彼女の病気はもう相当に進行していて、あまり食もすすまないようだった。夕ご飯をすませた後は、おつれあいや息子さんたちが、私たちを二人だけにしてくれたので、彼女の寝室にほとんどこもりきりで、夜中、彼女の話に耳を傾けていた。

その晩に初めて知ったこと。彼女は子ども時代に母親からずっと虐待を受けていたのだ。言葉による暴力も、からだを受ける暴力も。私が彼女と出逢った中学生のころにも、その暴力は続いていたという。

「ねえ、紅茶の時間にも、あたしみたいな子、いる？ お母さんから愛されない子や、暴力を受けた子、いる？」

ああ、いるなあ。一人ひとりの状況や虐待の中味は違っていても、母親から、産まなきゃよかった、とたびたび言われている子、たえず兄や姉と比べられる子、親の期待にそえず、言葉の暴力をふるわれている子。そして、子どものころ、心身に親からの傷を受け、今はとうに親になった大人たちとも、少なからず紅茶で出逢ってきたよ。

A子は自分が母親からされてきたことを、おそらく人には話さないできたのだろう。私がそんな子どもたち、大人たちを知っていると聞いて、どことなし、ほっとしたような、切ない表情を見せていたのを、今でもはっきりと思います。

それから半月ほどしてA子から届いた手紙に、

私はびっくりした。

あの夜、いっぱい話して、聴いてもらって、気づいたことがたくさんあった。その一つが、この家には、自分が母親からされてきたことの記憶がすみずみまでしみついている、ということ。

この部屋にもこの壁にもそれが刻まれてる。話しながら次々思い出したら、もうこれ以上、この家には住めない、こんな家に住んでたら病気だってもっと悪くなる、って確信した。だから、泊まってもらった翌日、家を探しにあって、小さいけれど陽当たりのいい、今の家に引越したよ、というのだ。

彼女の素早い行動力に驚いたけれど、裏返せば、そうせずにはいられないほどの歴史が、あの家にあったのだろう。ましてや、いのちの期限を感じていた彼女にしたら、ぐずぐずしてる間なんかなかったのかもしれない。

その後もう一度 A 子に会いに、彼女の引越し先を訪ねた。病状はまた進んでいたけど、彼女は自分で探したちいさな古い家で、家族とのあたらしい生活をはじめていた。

近くに病院があって、往診してくれるドクターともつながって、いつどうなっても安心だよ。あの家と手が切れて本当によかった、だから今は晴れ晴れした気分だよ、と話してくれたのが、彼女とかわした最後の会話になった。

それぞれの場所へのラブレター

A 子の場合は特別としても、人は多かれ少なかれ、家や家族にしばられているのかもしれない。ましてや子どもの時は、自分で家も家族も選べない。圧力みたいな家もあれば、中には、空気みたいな家だってあるだろう。

いずれにしても、おうちって、実にいろんなものを内包してる場所だ。懐かしさや愛着、といった感情だけでは、決して語れないところ。愛も憎も、しきたりもしがらみも、重たさもいとしさも怖れも、やさしさや嫌悪だって、その中に含まれていそうな、複雑きわまりない空間なんだろうと思う。

私自身は、西東京紅茶を可能にしてくれた姉の家に、ありがとう、と、そして生まれ育った家に

も、今なら素直にありがとう、と言える。でも参加している人の中には、家に対して手放しでそう思えるわけじゃない人だってきっといるだろうな。

なので、後半のワークショップは、「あなたが、ありがとう、と言いたいおうちか、または、あそこが私のこころのおうちかな、と思えるところ、たとえば誰かの家とか、お店とか、風景でもいい、そうおもえる場所への、感謝のお手紙をどうか書いてみてください」とお願いをした。

ラブレターの宛先

一人ひとりが書いた手紙の宛先は――

自分がつらかった時、寄り添い、守ってくれた、涙もいっぱい受けとめてくれた、長く一人暮らししていた時のマンションさん、というのもあれば、気分がもやもやする時に、おだやかな顔で包みこんでくれて、時には大きな声で叱りつけてもくれた、広い空とつながる近くの公園さん、もあり。

今は誰も住んでいないけど、かつてはにぎやかにお店をしていた、おじいちゃんおばあちゃんのお家へ。

住んでた時はちっとも好きじゃなかったけども、あのふしぎなつくりの家ゆえに、家族がすごくつながれた、と今になって気づく実家のおうちへ。

峠の茶屋みたいなカフェに。大好きな海辺に。「行ってらっしゃい」と「お帰り」を毎日言ってくれて、ぐちも聴いてくれる、家族と暮らす我が家へ。

事情があって移転せざるを得なかったけど、そのおかげで今、お客様と一緒に大切な場を作っているな、と感じられてうれしい3軒目のお店へ。

震災で傷んでしまったことが、大好きな分、すごく悲しい、でも大切にしたい、今のおうちへ。大きな宇宙の中のちいさな星の地球へ。

ラブレターをその場で朗読してくれる人もいた。そのまま読むのが気恥ずかしい人は、宛先と手紙のあらすじを、語ってくれたり。

思いがけず手に入れることができた、オンボロだけどはじめての私の家。はからずも少ししんどそうな息子たちの帰れるところにもなってくれた。

立派ではないけど、この家があってよかったな。そのことに手紙を書いてみて気づいた、という人。

母に対してのいろんなネガティブな想い、それを今も抱いているけど、思い浮かべた実家にはいつも花がいっぱい咲いていた。その花の世話をしていたのは、そうか、よく考えたらあの母だったんだなあ、と思い出した人。

2年前に最愛のおつれあいを亡くしたHさんは、「彼女が、私はみんなの心の中で生きるから、お墓はいらない、と言ったので、お墓はないんです。だからもちろん彼女は、僕の心の中で生きている。ある時期まではそう思っていたけど、最近になって、いや？違うな、僕が、彼女の心の中に住まわせてもらっているんだ、という気がしてきて。

なので、彼女の心が、僕の家。だからこの手紙は、彼女にありがとう、と書きました」

西東京紅茶の時間へのラブレター

みなさんの書いたラブレターを教えてもらった後は、この場所が大好き、といつも言っていた紅茶常連のNさんが、私にメールで送ってくれたすてきなラブレターを、参加してるみんなで二行ずつ輪読した。

西東京紅茶の時間とこのおうちへ

もうこれで最後、というのは寂しいけれど、お姉さんのお家が娘さんたちに引き継がれていく、というのはとてもステキだなあと思いました。

私は西東京紅茶の時間を過ごすことができ、本当に良かったと思っています。

西東京紅茶は、あのお家は、本当に優しい。心が穏やかになれる場です。

いつでしたか、お姉さんのお話をしていたら、お座布団がひとつ空いていた、ということもありました。ワンダーな場、ワンダーにあふれた時間でした。そして、本当に一期一会。毎回、違うのが楽しかったです。

と、書いていましたら、なんか、西東京紅茶さん(ちゃん、クン、氏?)に卒業証書をあげたく

なりました。私たちが卒業(ふさわしい表現かどうかわからないけれど)するんだけど、あなたも卒業だね! って。

いつもひとり静かに建っているところへ、年に何回かスウさんがやって来て、雨戸や窓や全てのドアを開けてまわる。

そのうちの1回は、西東京紅茶なんて言って、知らない人がやって来る。

知らない人どうし、ぎこちなく始まり、そのうち泣く人がいたり、笑ったり歌ったり、

そしていつも紅茶を飲んで、ほんわか優しく穏やかになる。

何やってるの〜? ってお家が言ってるかもしれない、と思いました。

また、こうも思いました。

西東京のお家は、何でも全てわかっているんだ。「私は、ずっとここで見ていたから知っていますよ。」

これは、クッキングハウスでするサイコドラマの、守護天使のセリフです。

本当にそうなんですわね!

あのお家は、スウさんのことも、いろんな思いを持って来てくれたみんなのことも、

ずっと見ていてくれたんだ、と気がつきました。

そういうふうと考えられると、気持ちがとても穏やかになりました。本当にありがとうございます。

放課後が終わらない

実は、一日目の紅茶は、ワークショップが終わっていったんお開きになってからも、話がどんどん深まって、紅茶の放課後はなかなか終わりそうになかった。

ひとは互いに、自分が日ごろから話したいと思ってるきもちを話し、また相手から聴きたいと思う話を聴いてる時って、双方ともすごく生き生きした表情になる。きもちが言葉と出逢っていく、その瞬間の感覚が、目の前の相手と自分の間を行ったり来たりする、濃い時間。

ああ、この時間、語り合いが、いっしゅんいちゃえだ、って思った。なので、いつもはしないこと

けど、ファイナル西東京だもの、と9時近くまで放課後紅茶を延長した。

居残り組は、愛知、甲府、東海村から来た人と、娘と彼と私。話の途中でお腹もすいてきた。その時出せる食事は、6人のお腹に全然足りない量だと知っていたけど、それをわけっこして一緒に夕ごはん。

そうそう、暖房がなくて毛布を出すことも、足りないごはんをみんなでシェアすることも、みっともないと思わずにできちゃうのは、やっぱり長く続けて来た紅茶のおかげだな、とその時思った。

かっこつけずそのまんま、ありのまんまの自分をひらく、という紅茶の理念は、こんなところにも生きていたんだ。

Nさんから、再び

東京から戻ると、みんなで輪読したあのラブレターを書いたNさんが、またメールで感想を送ってくれた。

西東京紅茶 最終回に参加できて本当に良かったです。

昔風に言うと書生さん？が参加してくださって、お姉さんのお話を聞かせてくださったのも楽しかったですね。お姉さんは今はもういなくても、いつも参加してくださっているのだから、と改めて思いました。

暖房なしで、みんなで毛布をかけて暖をとったのも、アウトドアみたいで楽しかったです。

西東京のお家への手紙を、みんなに読んでもらったこと、みんなでお家にお礼を言えたことが、なんとも嬉しかったです。

10年というのは一区切りつけるのにちょうど良い感じもしますし、一区切りつくことにより、私も他の人も、次のステップへ背中を押してもらえるのかもしれない、なんて思ったりもしました。

自分を責め続けて生きてきたお姉さん、スウさんと魂の会話を、最期はきっと違う気持ちを持つことができたと思います。(そう信じたい。)

でも、もしまだ癒し足りないものがあつたら、10年間の西東京紅茶がその役割も担ってき

たのでは、と思うのです。

毎回テーマは違ったけれど、どこか必ずお姉さんのお話もあって、お姉さんにお会いしたことのない私たちも、お姉さんの生き方に思いを馳せてきた。

スウさんが大好きで、西東京のお家が好きで、癒されたくて、優しくなりたくて、穏やかになりたくて、そんな思いで集まった私たちは、お姉さんのことも癒して優しく穏やかにしてきたと思うよ。

だから、けじめとして、と言ってくださったスウさんの言葉に、私は今は賛成です。

西東京紅茶に出会えて本当に良かったです。

「でも、もしまだ癒し足りないものがあつたら——」の段落を読んだ時には、おもわず涙がこぼれた。

あの場と時間を、このように感じてくれた人が確かに居た、ということ。10年に渡ったあの家での紅茶の時間が、亡き姉を癒し、やさしく穏やかにもしてくれてきたのだとしたら、そこにこそ、きっと西東京紅茶の必然があつたんだろう。

この夏からここで暮らしはじめる若い二人は、自分たちには、西東京紅茶ファイナルを見届ける義務と責任がある、という想いで、この日、参加していたのだそう(と、その日、彼らの言葉で言われて、ちょっとびっくりもしたけど)。

姉から結果的に私に譲られた家、私は私なりのこんなかたちで引き継ぎ、それを今度は彼らにバトンタッチしていく。その意味で、ファイナルの二日間は、新旧の仲間たちにも立ち会ってもらっての、紅茶流うちの引き継ぎ式でもあつたんだと思う。

仲間たちからも、若い二人からも、たくさんのありがとうを受けとった姉の古い家に、私ももう一度、大きな声であらためての、ありがとう！を言わせてもらおうね。

2013.5.25